

書評

マイラ&ディビット・サドカー『「女の子」は学校でつくられる』を読む

川合あさ子 訳

(1996 時事通信社 341P ISBN4-7887-9635-X 2,800円)

かや えみ こ
賀谷 恵美子

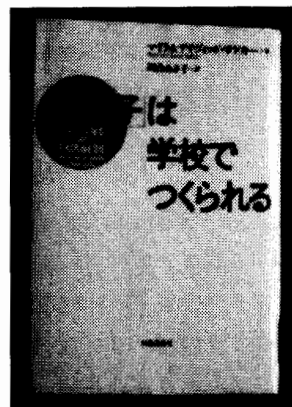
1994年に小学校から高校までの男女同一カリキュラムが実現し、日本の学校教育における男女平等は大きく前進したと言えよう。「いや、平等どころか、最近では女子の方が元気が良く、成績もいい。学校ではむしろ男子より有利に扱われているのでは？」こうした見方をする人は教師や教育関係者に少なくない。このような人々にこそ、ぜひとも読んでいただきたいのがこの本である。また、それぞれの家庭や学校で、できるだけ性による差別扱いをしないよう努力しているつもりなのに、現実の子供たちがなかなか既存のジェンダー枠から解放されないのはなぜだろうか、と憂慮している人々にもぜひ一読を薦めたい。理念として男女平等をかかげる学校現場において、一体何がどのように作用してジェンダーの不平等が若い世代へと受け継がれていくのかを、これほど具体的に分かりやすく、はっきりと私達の目の前に提示してくれる本は少ない。

もちろん、議論の対象は日本ではなくアメリカの学校教育である。教育法修正九条（72年）や男女平等教育法（74年）といった強力な法的措置を背景に、学校においても女子を男子と対等の存在にするための様々な取り組みが日本とは比較にならないほど進んでいるといわれる社会にあってもなお、原著の副題にあるように「学校は女子をだましている¹⁾」と主張する根拠はなにか。それは、「隠れたカリキュラム」の存在、特に教師の生徒への対応や生徒たち同士の対応の仕方が、制度や教科書の中味よりも強烈な力をもって彼らの意識や行動傾向を規制していく、という実態である。具体的には、同じ教室で同じ授業を受けていても、生徒に対する質問、助言、注意、励ましなど、教師の関心とエネルギーの大半は男子に向けられていて、女子は手のかからない、見えない存在として無視または軽視されている（「透明人間化」と著者は言う）。また、日常の子供たち同士の交流の中にも性差別が反映していて、女子は男子による蔑視や偏見、セクシュアルハラスメントに深く傷つき、結局周囲の期待を損なわないよう自己規制を強めていく。こうした差別的経験を重ねていく間に、女子生徒の独立心、学習意欲、自己肯定の芽はつみ取られ、教科内容に潜んでいる女性に対する偏見や固定観念の度合いがさらに強化され、累乗的な効果をもたらす。その結果、女子は

「自尊心の喪失、学力（特に理数教科）の低下、職業選択の不自由」と言った問題を抱えることになる、という。

最も衝撃的な事は、こうした教師の子供の扱い方や言葉かけに潜む性差別はあくまでも無意識のうちになされ、あまりにも当然視されているため、当の教師自身はもちろん、観察者の目をも易々とくぐり抜け、よほど研ぎ澄まされた感覚の持ち主でなければ、それとはっきりと認識することが困難なことである。著者たちは、3年余にわたってビデオを持ち込んだ教室観察を続け、膨大な資料を分析するという実態調査からこうした結論に達している。様々な教室場面の教師と子供たちのやりとりがそのまま文字化され、随所に紹介されているので、読んでいる者にはその場面が鮮やかに浮かび上がってくる。

日本の場合はどうであろうか。確かに、私自身教師として、質問には男子が答えることが多い。期待の裏腹としての厳しい言葉も、男子にかけることにそれほど迷いはない。問題行動を起こす頻度も男子が高く、とにかく男子を自分の管理下におかなければ授業が成り立たない、と思ったことも皆無ではない。自己認識の甘さを痛感させられる。そして現実にはもっとあからさまな差別的メッセージが私の周囲でも聞かれる。「教室が汚い。このクラスには女子がいないのか」「女子は浪人しない方がよい」などのコメントの他、男子が先の出席簿、持ち物の色、係り分担のさせ方、選択教科の取り方など、女子と男子を常に区別し、それぞれを社会通念上の「特性」によって判断する事がなんと多いことか。生徒の性別による二分法は、これまでの文化を反映して男性優位の価値観・秩序付けに直結している。「女子と男子どちらを先に呼ぶかなど、差別に関係ない」というが、女子を先にしたとたん、男子は「ずるい」と抗議をするという²⁾。些細に思われる事柄にこそ、教師の無意識の差別観が反映し、それが子供たちに累積効果をもた



らして、彼らの将来の可能性を狭めていないか。私達はこうした点にもっと敏感にならないかならう。現在進行中の「両性混合名簿」への取り組みはその象徴的な一例であり、学校の慣行がもつ子供たちの意識へのすり込みを見過ごすわけにはいかないのである。

この本から浮かび上がる女子の姿は、日本の多くの「女の子」たちにも共通している。ただ、サドカーの会った女子生徒たちにははっきりと学校での差別的取り扱いを意識し、それを言語化できる女子は日本では少ないかもしれない。教師同様、生徒の側も区別されることに慣れきってしまい、「学校は女子にとって楽、差別などない」と答える女子も多い。この様な現実こそ、実は日本の男女平等教育における最も根深い問題が隠されていると言えるのではないだろうか。

他方、日本では年齢が上がるにつれて一方的な知識伝達型の授業が多くなり、教師と生徒が質問や疑問、意見を交流しながら問題への理解を深めていくという形式は少なくなっていく。教師の生徒への対応もさることながら、教えられている知識・情報そのものに女性の経験の軽視や固定観念にみちた取り上げ方がされているという大きな問題があり、未だ改善が不十分である。日本では教科書・副教材などの「公的なカリキュラム」にも性差別が充満し、それをこの本が指摘するような教師と子供たちの相互作用などの「隠れたカリキュラム」がさらに強化・増幅している、と言えるのではないだろうか。

もちろん、こうした公平さを欠いた学校教育の中で代償を支払うのは女子ばかりではない。男子も達成や勇気、冷静さなど社会的に威信の高い男性役割の壁にぶつかる。目標が達成されない場合の挫折感は特に強く、中退や留年、学習・情緒障害、アルコール依存症など、様々なストレス症状に見舞われる度合いが高いという。男子の教育もまた、「誤っていた」のである。日本の場合には、さらに受験競争の加熱によるもう一つの過重なストレスが加わることで、アメリカとはまた違った大きな問題を、女子も男子もそれぞれに抱えることになるのである。

また、本書では共学校と共に、男女別学校の問題も論じられている。公立学校における男女別学は現在のアメリカでは法律違反になるというが、様々な研究・調査を総合した結果は複雑で、共学/別学のどちらが良いと、単純に結論づけられるものではないようだ。女子が苦手とされるリーダーシップの養成や、理数科能力の向上などについては、女子だけによる授業や学校環境がプラスに働いているという報告が多い。別学によって女子が教育から排除されてきた歴史の長い日本においては、戦後の共学制が民主主義理念の一つである男女平等を体現するものと見なされてきたが、「隠れたカリキュラム」の視点は、現状の「男女共学」

の実質的な中味を問うことなしに、教育における「機会」の平等が「結果」の平等につながる、と安易に考えてきたことに、大きな警鐘を投げかけているのではないだろうか。

また、著者は教室にビデオやカメラを持込んでの長年の研究結果から教室観察用チェックシートを開発し、教育実習生の指導や現職教員の研修用ワークショップに活用しているという。日本でも最近ようやく、教育をジェンダーの視点から見直し、学校教育の中味を、そしてさらに教員養成や研修のあり方を変えることによって教員のジェンダー意識を変えていこうという気運が、高まっている。この本に見られるような研究と実践との共同作業はとくに重要となってくるだろう。日本の学校はどこまでこうした試みに門戸を開き、教育の中の性差別は正に本格的に取り組み始めることができるだろうか。教師自身による意識改革と同時に、教育行政のあり方が大きな課題となってこよう。もちろん、男女平等の実現は学校教育だけでできるわけではない。子供達のジェンダー意識は学校外の家庭、地域社会、そしてマスメディアによっても大きく影響されている。しかし、学校が変わらなければ、社会の性差別を克服していくための新しい意識や力を彼らの中に育てることは難しい。

最後に、アメリカのような多民族社会では、人種・民族、階層といった要因がどのように学校における性差別の問題と関わっているのか、という視点も重要と思われるが、この本ではもう少し詳しくふれてほしかったような気がする。また、作者の主張を裏付けるために紹介されている種々の事例は、かなり幅広い年代にわたって様々な地域から取り出されているため、日本にいる私達がアメリカの現状を把握しようとするときには、その多様性に注意する必要があるかもしれない。それにしても、この本が日本の教育に投げかける課題は、計り知れないほど大きい。両性の平等を推進するための教育とはどうあるべきかに関心のある人、性差別のない社会を実現したいと願う人、すべてにとっての「必読書」と言えるのではないだろうか。サドカーの主催するワークショップに是非参加してみたいものである。

(東京都立上野高等学校 教諭)

注

- 1) 原題は "FAILING at FAIRNESS-How our schools cheat girls" 直訳すると『公正さの失敗—学校はいかに女子をだましているか』
- 2) 男女平等教育をすすめる会『どうしていつも男が先なの?—男女混合名簿の試み』 新評論 1997